

国際派青年経営者おおいに語る

— 国際化時代、変質の時代に生きる —



木材業界も4年続きの好況のうちに、新しい年を迎えました。しかし、この間にも企業を取り巻く経営環境には様々な変化がありました。例えば、外材依存率の上昇に象徴される木材流通の国際化、製品輸入の増大傾向、また熱帯林の乱伐による環境破壊キャンペーンの激化、あるいは好況のつけともいえる労働力の極端な不足、最近では湾岸危機によるエネルギーコストの上昇、金利高、株価の下落などです。

そこで今年の新春座談会は、清新な若手経営者であり、また海外事情に詳しい4人の方々をお招きして、北海道木材青年経営者協議会旭川支部事務局長である上畑正和氏の司会で、林産業を巡る環境の変化とその対応について、奔放に語っていただきました。中身の濃い、しかも長時間にわたるお話でしたので、勝手ながら集約させていただき、新年号と2月号の2回分けて掲載することにいたしました。

(編集子)

ご出席いただいた方々は次の通りです。(敬称略・順不同)

- | | |
|---------------------------|---------------------------|
| ◇ 北日本木材株式会社
常務取締役 高原 郷 | ◇ 昭和木材株式会社
専務取締役 高橋 秀樹 |
| ◇ 北星林業株式会社
取締役社長 渡部 泰範 | ◇ 上坂木材株式会社
取締役 上坂 勝司 |
- (司会) 北海道木材青年経営者協議会旭川支部
事務局長 上畑 正和

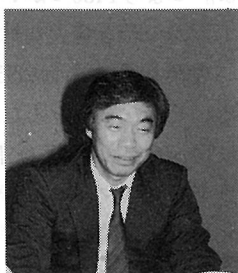
環境問題と森林資源の調和について

司 会：明けましておめでとうございます。年改まったからといって、諸情勢にわかに変化するものではありませんが、苦節の1年を乗り越えた事実は、今年もやろうという気持ちへのはずみにもなるわけで、今日は“国際化時代に生きる青年経営者おおいに語る”で盛り上げていただきたいと思います。

ここ1～2年の動きを見ていると、環境保全の問題から、製材を中心とした流通国際化、エネルギーコスト高、金利高、労働力不足など木材界の環境も質的に変化しています。「変質の時代」の感を深くするのですが、木材界と世界がどう動くか、1億2千3百万人日本国民がどう動いていくか、その生産、消費動向をよく見て勉強していくことが基本だろうと思います。

周知の通り、「環境」という言葉が人類のキーワードになっていますが、森林資源との調和、木材資源をどう確保していくかも含めた環境問題について、まず高原さんからお聞かせ下さい。

高 原：非常に難しい問題ですね。業界紙や一般新聞紙上で読んだり、海外ニュースで聞く程度で特に深く考えているわけではありませんが、資源保護を叫んでいるグループは、直接林産業に携わっていない人達であり、その問題によって最も影響される林産業界の主張が出てこない。主張しても一般マスコミで取り上げない現状があると思います。この問題に対しては、これからは資源保護グループと木材業界というような、団体と団体との対話の形で進めてほしいし、しかも両方の意見が平等に出てくるよう、行政の配慮もほしいと思いますね。



高原さん

上 坂：ある雑誌で読んだのですが、1年間に失われる森林の量の95%は、ほとんど燃料として消費され、林産業で消費されるのは5%に過ぎないそうです。この事実を自然保護団体はわかって

いない。発展途上国といわれる国々の燃料として使われたり、焼畑農業で失われているのが実態とすれば、これを改善しない限り真の資源保護にならない。

中国、ソ連やインドネシアなどの南方でも、切った後の植林に熱心でないところにも問題があると思います。先進国が発展途上国を援助したり、農業技術を援助することが、根本的解決のために必要ではないかと思いますね。

司 会：資源は経済成長とは同じには成長しませんね。2010年には世界人口が100億人になる予測が出ているんですが、経済と資源の関係は心配される点がありますね。

高 橋：生活レベルの維持と資源の保護という問題ですね。しかし、これは木材だけに限ったことではないと思います。増え続ける人口に対してどう食料を供給していくか、もう一つは電気の問題ですね。今の文化的な生活を維持するため原子力発電をするか、それとも放射能公害を避けるため生活レベルを下げるかということですね。



高橋さん

日本になぜ世界中の木材が集中するのか、私もよくわからないのですが、何よりも日本民族は木材に対し他の民族よりも密着性が高いということで、大目に見ていただくしかないと思いますね。

渡 部：工業製品の原材料としては、木材、石油、石炭その他金属等色々ありますが、再生産可能な資源は木材だけです。石油とか石炭とか他の資源は取り尽くされても我々の目にはふれませんが、森林は切るとなくなったことが一目りょうぜんだから、これは大変だとなる。でも、森はあると思います。ただ、飯の種としての用材、製材用原料の資源は確かに今は少なくなって、質も悪くなっているけれども、我々の時代は過渡期であって、きちんと植林をしていけば、将来この先は決して暗い状況ではないと思います。

日本人としては、自国の資源を育てていかなければならないのですが、当面一番条件にかなった土地から持ってくるとすれば、外材に依存せざるを得ない。今は熱帯林よりも北米で言うBC州、ワシントン州、オレゴン州あたりはもっと森林はあるような気がします。

高 原：木材資源が不足していくと世の中ではよく言われていますが、必ずしも人間の生活が木材の消費を限りなく増やしていくものでもないと思うんです。と言いますのは、木材に対する代替材はいくらでもあるわけです。我々は木材屋どうしの競争もあるでしょうが、しかし大きくは木材屋として、他の木材品代替産業と一般市場で競争しなければならないわけです。それを支配しているのは自由経済であり、その市場で手に入る材料の品質と価格と納期などが決定要因になって物が動いていく。したがって、仮に木材資源が本当に枯渇していくとすれば、どんどん木材の値段が上がって、いずれは誰もが使えないようなものになる。現実にもそういう樹種も世の中に存在しています。だから、資源と人間の生活の捉え方ですが、木材資源が有限であって、それに対する人間の消費が限りなく伸びて、いずれ原料が無くなるのは必ずしも結論づける必要はないと思いますね。

また、現実にも我々が外国から入れているのは外国から入れた方が、林産業が成り立つ十分条件があるからだと思います。もし、自分の裏山にある資源で十分林産業の経営をやって行けると判断した場合には、必ずしも外国から買う必要はない。現実には外国から買って来るということは、あくまでも経済的に自由な判断で買っていることであって、例えば、砂漠の国のように木が無いから買わざるを得なくて買っているのではないんですね。

司 会：環境問題については国も環境白書なんかに載せていますよね、控えめですけど。そういう問いかけに、今出たような話の論理がきちっと整理されて、環境団体などに反撃ができるかという意味では、必ずしも木材屋さんの中に浸透していないところがあるんじゃないですか。

高 原：それでそういう団体とのコミュニケー

ションを図る必要がある、誰か中に入ってね。仲裁役が政治だと思っただけでね。

上 坂：一カ月前でしたか、週刊ポストに割り箸の問題が出ていたんですけど、割り箸になる材料は70~80%がそのままに置いていたら薪にしかない木で、逆に有効利用なんだということが載っていましたね。そういう認識は必要だと思うんです。



上坂さん

高 原：高橋さん、アメリカでなかったでしょうか、「お父さんや私の生活とフクロウとどちらが大事なんだ」という新聞の記事がありました。その人は木材運搬トラックの運転手の子供で、その子供の写真が載っていましたね。そういうのは日本の新聞には出てこないですよ。

高 橋：西海岸のシアトルタイムスあたりには、そのことについてはものすごく載っていますよ。つまり1460つがいのマダラフクロウのため、1万人の職と莫大な林産収入が失われる。一つがい当たりのコストが9500万ドル（130億円）となる。そんなら、みんな殺した方がいいなんてね。

司 会：「NTTは割り箸を使いません」というテレビコマーシャルを見たことがありますか。北海道では流れていなかったんですが、割り箸協会で抗議したことがある。これは薪にしかないものだ、しかも森林を育てるためには必ず伐採が必要だ、そうすると割り箸を使うことで森林を育てているという種の抗議をしているんですね。その時は物別れに終わったそうですが、その1週間後に放映を止めたということがありました。

資源はどこに期待できるか

司 会：さて、外材を入れた方が林産経済の十分条件に合うとすれば、それはどの国に木材資源を期待できるとお考えですか。

高 橋：これからどこから木を持って来るべきなのかについては、去年出た未来総研の木材

資源像によりますと、成長量と伐採量の将来像は北米、ソ連が資源的に有望な国であるとの位置づけになっていますね。

司 会：中国は入っていないんですか。

高 橋：入っていませんでしたね。

上 坂：中国という国はきちんとした統計がありませんし、社会インフラもほとんど整備されていませんから、道路にしてもトラック輸送にしても、人口でさえも全くアバウトです。まして、木の成長量と伐採量などは非常にアバウトですから、私も何回か行っていますが、あの国ははっきりいって訳が分からない。だから先程いったような植林と伐採、成長量とかトータルな面から見ればやはり北米の方が良いと思います。また、私の感じから言えばソ連は広葉樹に関してはあまり未来性はないんじゃないかという気がします。

司 会：ニュージーランドとかベトナムはどうですか。

高 橋：ベトナムはこれから面白い場所ですね。

上 坂：現実にベトナムに行って、丸太を持って来ていますから。

司 会：当分は丸太でしょう、ベトナムは。

上 坂：そうですね、針葉樹系を持ってきていけるようですね。

司 会：向こうの立ち木には昔のピストルなどの玉が入っていると言っただけじゃないですか。

上 坂：入っていると言う話ですよ。

司 会：ニュージーランドはどうですか。

高 原：ニュージーランドには皆さんご存じのように、パイン系の木がずいぶんありますし、植林も含めまして、将来有望だと思います。ベトナムは共産化される前はベトナムパインといって、ずいぶん持ってきていましたよね。色々な堅木を私も昔入れたのを覚えてますけれど。

渡 部：構造材としてはどうでしょうかね。日本の住構造というのは、どちらかというとも梁とか桁で持たせますよね。壁面構造でないから、どうしてもラジアータパインとかチリのチリ松というものもあるけれども、強度的には弱いと思うんですよ。それと日本の場合、見た目感覚というのが大事

ですから、あの辺は木があっても我々が物を売る段階で製品化できるかという問題もあるんですよ。今年入れられた会社があるけれども、あれはちょっと難しいですね。

高 橋：この間アラスカの資料が送られてきたのですが、丸太の場合1991年をピークにして伐採量は次第に減っていく。基本的にアメリカの国有林は輸出禁止なんです。今から10年くらい前特例によりアラスカに住むインディアンの生計のため国有林を払い下げ、丸太を伐って輸出しても良いことになった。これがどんどん拡大していきまして、今年がピークになります。もう既に伐採の終わった林区も数多くありますから、これからはだんだんと減っていくと思います。

それから、アメリカの本土の方ですね、これにつきましては皆さんご存じのように、マダラクロウ問題でオールドグロスの太い立派な丸太を伐ることはだめだ、そうすると国有林の木で生きている自国の製材工場の丸太が不足する、その分を輸出から回して供給する、5年後の輸出は今の25%くらいまで落とすと言う政策です。しかし、ちょっと予測のつかない面もありますが、向こうの林産物業界としては生きていかなければならないので、当然ターゲットを日本に絞って出してくると思いますよ。そうすると原材料は減ってくるけど、製品は増えてくるのは当然でしょうね。

輸入製材の加工精度、規格について

司 会：今、輸入材は全体としては製材にシフトしていますね。そのグレードはずいぶん良くなっていると聞いていますが。その点、上坂さん、中国の加工技術はどうですか。

上 坂：2～3年前の中国の製品は製材の形にはなっているけれども、製品とはとても呼べない状態だったんです。しかし、まだ悪い製品もありますが、このところの製品は非常に良くなって来



渡部さん

ていると思います。もともと山東省近辺、上海が租界地だったところですが、イギリスとかフランスとかが結構ナラの製品を作っていたものですから、戦前からその技術がありましたので、山東省近辺の製品はかなり良いものが入って来ている。厚みにちょっとむらがあるとプレーナーまでかけて持ってきている状態です。

質的には、ナラに関していえば、しらたの問題がありますが、中国の丸太はしらたが非常に薄いものですから、製品が良くなって、しらたが薄いということでもかなり評価しています。傾向としてはこれからどんどん良いものが入ってくるようになると思いますね。

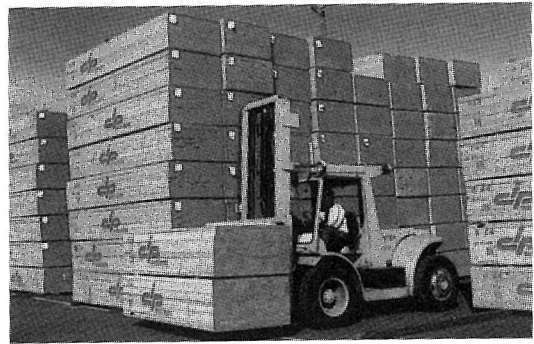
また、伊藤忠さんとソ連との合弁工場で作った製品を千葉港に入れているのですが、これもちょっと問題はありますが、日本人が行って検品しているそうなのでかなり良いものが出てくる。そういう意味では中国もソ連の広葉樹も、北海道の広葉樹製品を脅かす地位まで完全に来たと言えますね。そのおかげで北海道挽きのナラとかタモの製品の値段の下落がこのところ続いている。これはかなり深刻な問題だと思いますね。

針葉樹にしてもアメリカ、カナダの工場がJASの認定をとって、3.5角をどんどん挽いてくるだろう。これも最初のうちは問題があるかも知れないが、そのうちかなり良いものになってくるはず。そういう意味で北海道の針葉樹なり広葉樹の工場が、これからどうやって生きていくか問題になってくると思いますね。

司会：高原さん、アメリカの品質は日本に入っても、こちらのマーケットに十分通用する物になっているんですか。

高原：広葉樹に関する限り、まだアメリカの製材の日本市場に占める割合はさほど高くはないと思いますので、現状ではアメリカの各広葉樹製材業者は今までと同じ挽き方でやっていると思います。ただ、需給バランスが時とともに変化していきますので、需給バランスが崩れて売れなくなれば、誰だってどうして売れないのか、どんな物が売れるか、どうすれば売れるか、考えますよね。

彼等も質を改善しようと思えば、それなりの知識とか資力とか余力は持っていると思いますので、いずれは日本のマーケットに十分通用するものを作る時が来ると思います。現状はまだ具体化しているところは少ないとは思いますがね。



カナダの製材品

渡部：カナダの場合、製材工場でJASの認定工場は今のところは無いです。合板工場が認定を受けようという動きはありますがね。ただ、NLGAのグレーディングで、昔はショップとかFFとかを再割りしてクリアものを取るという考え方でいたんですが、それをNLGAと全く違う日本向けの規格を作って行く動きがありますね。まだ日本に入っては来ていませんが、また、ある会社はカッティンググレードと言っていて、リカバリー率で持っていくグレードのものを作り出しているんですね。これはどちらかと言うとJAS規格に似ている。ですから、これからは日本のグレードをまねた製材が入ってくることは間違いない気がしますね。

需要減少の方が心配

司会：原料ではそう心配ないという方向になると、問題は需要がどうなるかですね。

高原：我々としては今年も本当に需要があるのか、需要は有るけれど需要の減りの方が心配ですね。と言うのは、かってオイルショックまでは年間180万戸、200万戸の家が建ったわけですよ。それが一挙にオイルショック以降120万戸に

下がった。米材にしても100万立方ぐらい当時丸太で入っていたのが、何年か後には60万立方、南洋材にしても150万立方入っていたのが100万立方まで下がったわけですよ。それから徐々に経済が回復して今南洋材で120~130万立方、米材で70~80万立方くらいですかね、そこまで回復して多いときで100万立方くらい入りますけど。これから突入していく時代は資源が足りないというより、逆にいかに今までの需要を確保していくかというほうが切実な問題と思っているんですよ。

司会：今の建築ブームの起爆剤は何だったかと言いますと、金利の低下ですね。今のように金利高になって、しかも関税でも不利になって来ている状況下で考えると、需要減退ということが何となく映るんですね。



上畑さん

高原：針葉樹の方で今年の着工の予想をしましたけど、150万戸くらいと予想してますね。

渡部：はっきり言って、今年の夏まではまあまあ水準じゃないですか。それ以降は読めません。それよりも、大手の工場を見ても生産性では負けるから、営業部門を強化して物だけを右から左へ動かす。物が無ければ商売にならないから物を加工してしまう。だから、実態のマーケット以上に物だけが入ってきている可能性はありますね。うちらだって利益が全然無いのに売上げだけが上がっている。

高原：木材が少なくなって価格が上がったから他のものに代ったと言う物はまだあまりない。ただ高くなった木材は安い木材に代替される。安いものは悪いから安いという面はあるでしょうが、末端の需要者は多少品質が悪くても安いものを使うことによって、例えば1割安ければ5%は犠牲にしても残りの5%を企業努力で利益に変えてしまう。我々のお客さんの努力は大変なものなんです。また、供給過多だから、中には損をして売る人もいるでしょうし、いくらでも安いもの

が出てくるんですよ。

そうしてなかなか値段を上げられないでずっと来ているんですよ。外材が入ってくることもそうですけど。

上坂：それも広葉樹に関して言えば、塗装技術とか加工技術とか、塗料が非常に良くなったということが一面であるわけですよ。確かに、ナラ系統にすれば北海道のミズナラがいいわけなんです。家具にしても塗装技術の精度が上がったから、多少の物だったらもうほとんど同じように見え、素人さんは全くわからない。そういう技術の進歩があるものですから、昔はこの色合いであればコストが上がっても北海道材で仕方がないというようになってきたものが、ちょっと手間がかかるけれども、これと似たような物があるじゃないか、塗装さえうまく行って、作業工程さえ良ければいいんだ、ということで代替されてしまう。

それと日本が円高になったことによって、中国、ソ連、アメリカというように選択肢がこの4~5年前よりずっと増えたことも事実ですよ。そんな点で北海道の広葉樹が厳しくなっているというのが事実じゃないでしょうか。

高原：それにアメリカの人にすれば日本に売ったほうが高く売れるんですよ。今まではね。これからはどうかわかりませんが、高く売れる方へどんどん出してくる。日本からすると随分安い物が入ってきている。おそらく、円高が一番の要因なんでしょうけど、その意味では彼等の輸出圧力はまだまだあると思います。

供給過剰も心配

司会：これでこの3~4年間の好況の間に設備投資はかなり進んでいるのでしょうか。

高橋：そうですね。結局、いい状況が4年間も続いたため設備投資が進んで、供給が肥大化してしまっただって、持ってくるもの、生産したものが、一応売れてしまうんですよ。それで、資源問題のバランスをみると、外材に依存しなければならぬけれど、この3~4年の間に150~160万戸体制、北海道でいうと8万5千戸体制が

出来上がってしまって、これに対し木材屋は一円でも安いものを一円でも有利にということで、世界中をかけずりまわっている。今から2年前くらいからそれが定着して供給過剰体制になっているんですよ。ここに来て、それが顕著に現れてきた。だから、忙しいだけ忙しくて、利益が全く上がらないと言う体制が現在なんです。これは真面目な木材屋さんが一生懸命やった結果なんです。

高 原：その結果、木材価格は30年前の3倍にしか上がっていない。円高がものすごく大きな要因の一つですがね。

渡 部：円高は日本だけでなく、世界中に影響を及ぼしてしまった感じがするんですね。例えばラワンでも今年の春先は、物が無いから石4万円を切らないとか、在庫を抱えても売らないとかね。ところが円高のため秋口からはメタメタですよ。入って入ってしょうがないですね。ある程度予測していたと言えはあかしけれど、彼等は木材を売るしか外貨を稼ぐ道はないんですよ。

カナダでは儲ったお金を株主に配当しないで、製材工場の設備投資に莫大なお金をかけてしまった、どこの会社も。その設備投資が日本向けになったのが、ここにきて大変な影響を及ぼしてくると思いますね。だから、木材輸出はその国が木材資源をどのように見ているかで違うと思うんですよ。アメリカにとっては木材はたいした物でない、他のものでも外貨は稼げると思うんですよ。カナダはないんですよ、木材以外は。

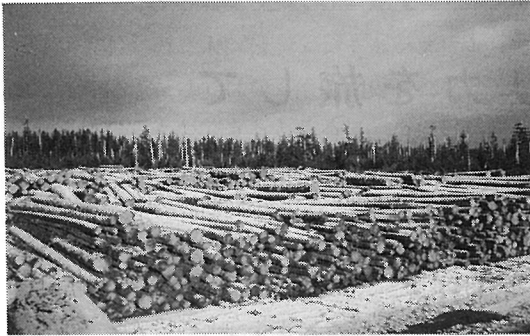
高 原：南洋材が今だぶついてしょうがないんですよ。製品なんか半値になってしまったよね。半値になった商品は南洋材以外にないんじゃないですか。一番資源問題で騒がれている南洋材がものすごくたくさん入ってきているのはどうしてかと言うと、日本のかなり大きな会社が5年とか8年とか長期に見て、向こうに投資して工場と一緒に作っているんですね。投資した日本の会社から見るとマーケットにかかわらず、物を動かさなかったら資金繰りにつかないんですよ。現地の人が出さなかったら、向こうが金詰まりになるというのもその通りなんです。逆に日本の会社が

向こうに何百万ドルも投資して工場を建て、それを回していくには、日本の会社そのものが向こうから物を入れなかったら、全体の回転がうまく行かない。こういった動きが、実は南洋材でもこれからは丸太が駄目になって製材になりますよという、皆行って製材工場を作るわけですよ。製材が駄目で今度は加工になりますよとなれば、加工工場を作るわけですよ。アメリカの場合もジョイントという形で、どんどん先を読んで走っているんですよ。結局、木材は日本にどんどん入ってくる。

上 坂：それとソ連にしても、中国にしてもどんどん物が欲しいんですよ、機械でもなんでも。そうすると支払う代金が無いからバーター交換にする。手近な物というのは一次産品の魚であり、木材である。ですからそういうものを乱伐することになってしまう。それで3年前あたりは中国材は11万立方、一昨年は7万立方、去年は4万3千立方と入ってきているという結果があるわけですね。木材業界が欲しくて買ったのではなくて、たまたま機械を売った商社筋が、代金が無いから木材でどんどん持ってくるからなんです。この傾向は共産圏に多いですね。

高 橋：シアトルタイムスに載っていたんですが、資源保護の問題でね。非常に面白いのは米政府の自然保護小委員会とスーパー301条小委員会が偶然同じ部屋になった。一方は米国の自然を護るため、日本への丸太輸出を止めるべきだと言う。301の方は日本が製品を輸入しないのは海部首相が自国の製材工場保護のため制限して、丸太のまま買うからだと言う。その両委員会が握手して、全面丸太輸出禁止一歩手前まで行ったのは事実なんです。

渡 部：アメリカの統計を見ると面白いのは、製品輸出も多いけれど、原木輸出のほうが多いんですよ。やっぱり、商売自体は原木を動かしたほうが儲かるんじゃないですか。工場が赤字経営でも、原木を売って利益を上げようという形は、日本もアメリカも変わらない気がするんですよ。彼等がどんないいかっこうしたって、商売を続けて



アラスカの原木土場

行くんだったら丸太を輸出しないと、工場経営はできないんじゃないですか。

高原：ニューギニアにいたとき、ニューギニアの林野の人達といつも議論して最後まで解ってもらえなかったのですが、彼等は原木の輸出を禁止すると言うのですよ。15年も前の話ですけどね。国内の産業を発展させるために、原木を輸出しないで国内で製材にするとか、スライスするとか彼等は言うわけです。今どこでもやっていることですけども。それで私が言ったことは、木材というのは素材のままだから価値があるんだと。それを適材に使えるからこそ始めて木材は価値があるんだと。同じ丸太を例えば3センチの厚さに挽いたら3センチの板でしか使いようがないけれど、原木で持ってきたら剥くこともできるし、つくこともできるし、また製材にすることもできる。3センチでなくて1センチの製材にも取れる。それは日本の木材屋が原木を持ってくることによって、その場で一番いいタイミングで生きた料理をすることができる。料理の仕方によってものすごく価値が変わるんで、決して製材することだけが価値じゃないんだということを何度も言ったんだけど、結局わかってもらえなかったね。

渡部：それは今彼らに定着していることじゃないんですか。ホワイトオークでも今はべらぼうに高いでしょう。アメリカのつき板用材は、日本とあまり相場が変わらないんじゃないですか。その利益は何に振り向けているかと言えば、工場の赤字に埋めてるんじゃないですか。この体質が変わらない限り、原木を輸出しないと彼らは食べていけないですよ。だから工場を見ると選別の所などはほころががぶっているんですよ。製材やりたくないんですよ。伐採権があったらね。だから怖いのは製材を出す会社が自社林をたくさん持っていて、製材工場はどうでもいいのかという場合ですよ。

高橋：どうも木材屋さんは真面目なんだね。一生懸命やって供給過剰になっているんですよ。大手商社の木材部はほとんど南洋材からスタートして多くの人員がいる。しかし、南洋材は丸太、生製材が輸出禁止となり、乾燥木取り材となった。また、合板のように、産地国が販売独占権を持つと木材部はどこかに行かなければならない。結局、米国広葉樹かソ連しかないんです。ソ連はちょうどペレストロイカで、針葉樹で3工場、広葉樹で2工場のジョイントベンチャーが興りつつある。3年のうちに3万立方の広葉樹が入ってきますよ。

は向こうですけどね。

司会：ところが今の状況では工場規模にあった原木が入ってこないとか、色々な問題があるみたいですよ。

高橋：大変な苦しみだと思いますね。商社としては北洋丸太で年間10億円も損したと思えば、将来への投資と考えて3億や4億の赤字はどうでもいいという思想で生産する。その結果が供給過剰になるんですね。

(次号をお楽しみに)